

西向く侍 小の月

2016.11.7 校長 西谷 秀幸

富士見まつり、榛名移動教室、生活科遠足の話。

「西向く侍 小の月」、聞いたことがある人はいますか。

10月は31日まででありましたね。そういう31日までである月を「大の月」といいます。それに対し、11月は30日までしかありません。そういう31日までない月を「小の月」というのです。



では、「西向く侍」とは、どういう意味なのでしょう。

「にしむく」は、「2」「4」「6」「9」、つまり「2月」「4月」「6月」「9月」のことを指しています。では、なぜ「さむらい」なのでしょう。

「11」は、漢字で書くと「十一」になります。これは、漢字の「士」に似ていますね。これは、「武士」の「士」という字で「さむらい」とも読みます。だから、「西向く侍」なのです。

日本では、江戸時代まで、月の動きをもとにしたカレンダーを使っていました。ところが、今から150年くらい前、明治時代になるとヨーロッパのカレンダーが使われるようになり、31日までない月が何月なのか分からなくなってしまうように、このような「西向く侍 小の月」といった語呂合わせで覚えたのです。

皆さんも、今月は31日までである「大の月」なのか、31日がない「小の月」なのか、分からなくなってしまうように「西向く侍 小の月」という言葉を覚えてみましょう。また、この文は暗唱詩文集に載っていますので、自分の学年以外の詩文もぜひ覚えてみましょう。

これで朝会のお話を終わります。

(裏面に「先生方へ」があります)

〈先生方へ〉

読書旬間（全校朝会なし）、榛名移動教室、生活科遠足と続いたため、3週間ぶりの全校朝会です。

榛名移動教室では、5年生が時間を意識して行動したり、スリッパや上履きを揃えたり、友達と助け合ったりするなど、宿泊行事ならではの成長を見せてくれました。また、生活科遠足では、2年生が1年生をリードしながらお兄さんお姉さんらしい姿を見せてくれました。どちらとも、行事を通した成長の様子が見られ、嬉しく思いました。

さて、今日は、11月ということで、暗唱詩文集にも載っている「にしむくさむらい 小のつき」について、話題にしました。1年生の教室にも掲示されており、1年生の子供たちも暗唱して口ずさんでいたことから、11月になったら話題にしようと思っていました。「11」を「十一」→「士」＝「侍」と発送するところが、いかにも日本人らしくて面白いですね。

以前もお話ししましたが。暗唱については、自分も担任時代にたくさんの名文・詩文を覚えさせてきました。朝の時間・帰りの会・隙間の時間はもちろんのこと、1時間目・3時間目・5時間目など、休み時間直後の最初の5分程度を使って、継続的に取り組んでいくことにより、子供は声を出すことに慣れ、ものの覚え方を身に付けて、自信をもつようになります。そして、それは言語活動の基礎として培われます。また何よりも、そのあとの学習に集中して取り組めます。休み時間直後、子供たちが全員揃わないときから始めると、「早く教室に戻ってくると、知的なことを身に付けることができ得をする」…そんなことも実感させることができ、休み時間との切り替えが良くなってもきます。

ぜひ、1日のどこかの時間に、5分程度で良いので、時間を見つけて継続的に取り組んでください。また、クラスで取り組んだことが発表できそうになったら、声をかけていただけるとありがたいです。よろしくお願いします。

今週から、1年2組を中心とした挨拶運動が始まります。1年生をともに、大人が率先して行い、挨拶を徹底していきましょう。

【資料】 「西向く侍 小の月」について

「にしむくさむらい しょうのつき」。これは暦上、31日まである「大の月」に対し、28日または30日しかない「小の月」を覚えるためにできた語呂合わせです。

「に」「し」「む」「く」は、それぞれ「2月」「4月」「6月」「9月」、そして、「さむらい」は「11月」。「11」は漢字にすると「十一」、これを縦並びで書くと「士」の字になります。「士」は武士の士で「さむらい」とも読むため、それで「2・4・6・9・11」＝「にしむくさむらい」なのです。

現在使われている1～12月は西暦の暦であり、日本には明治5年から導入されました。それまでの天保暦、太陰太陽暦からグレゴリオ暦・太陽暦へ移行し、完全に日常生活に普及したのは第二次世界大戦後とも言われています。もともとは太陽の昇り沈みで生活していた日本人にとって、西洋式の時計は勿論、暦やカレンダーも馴染みが薄く、浸透するまでにはとても時間がかかったようです。